

<今回>295回目 2021年6月11日(月)16時~18時 第9会議室

読書は10冊目「失われた九州王朝」再読 p317、倭国と推古紀 より

<前回>294回目(21-5-28)出席者 7名

資料(21-05-28-1)前回のまとめ(清水)

(21-05-28-2)内官12階と冠位12階(清水)

(21-05-28-3)5行説(高山)

A 報告 コロナについて情報交換した。高山氏は第1回目を打ち終わった。近所の開所したばかりの開業医は穴場(茅ヶ崎市)と思って予約した。数日肩を動かすと少し痛かったが、打った時の痛みはないそうだ。

B資料 2)内官12階(隋書)と冠位12階(推古紀)の比較。礼の順と智の順に特徴がある。倭国は孔子の儒教の徳目と順序は同じ。推古紀は3番目が礼とか外形を重んじるか。智が最後とは単なる物知りとしたか。

3)五常の循環思想が根底にあるのではないか。順番で変化し、順位を表すものではないのではないか。

C読書 阿蘇山と如意宝珠

1)場所の決め手は阿蘇山である。阿蘇山は噴火している。噴火すれば禱祭を行う。

2)如意宝珠 青く、鶏の卵の大きさ、夜は発光と言う。魚の眼精の如し。中国使節は夜の発光は見えていない。岩波文庫の解説は眼精なりという。倭人の信仰対象の正体は実は魚の眼精という。仏教用語である。魚の眼精への信仰は海洋民族の信仰で、仏教と結びついている。引用の経には巨大な魚(鯨のような)の眼精を示唆している。また貧者の救済(商売のタネ)にしているところがある。経典名から当時の倭国へ影響を与えた仏教の性格を伺う上で新しい扉の戸口となる。(日本神話には海彦、山彦の塩満玉、塩干玉の伝承がある。)

3)近畿地方の山河名勝の描写はない。推古紀によれば裴世清は筑紫より瀬戸内海を通り、大阪湾から近畿大和に入っている。全海湖水のような瀬戸内海の風景、琵琶湖の優婉さ、青垣美しい奈良盆地の特色が描かれて当然なのに全くない。倭国の中心地に阿蘇山が噴火活動中で存在していることのみ描写。

4)筑紫への道行き 百済—竹島—(南望耽羅国)—都斯麻国—大海—(東)—支国—竹斯国—(東)秦王国—十余国—海岸①秦王国の解釈、(中国では国王の兄弟か親戚の国(領地は小さい)私(清水)は太子利歌彌塔利の領地)②十余国の領地の広さの想定。後年の播磨、備前などの大きさか。環濠集落程度の範囲か。③東の表現は長里3千里で近畿か。④裴世清は推古紀では難波に着いていること。

5)倭と倭の間 ①倭国は百済新羅の東南にあり、②安帝の時(西暦57年)倭奴国と、わざわざ倭奴を倭奴と書き直ししている。③開皇20年(600年)倭王あり、姓は阿每、字は多利思北孤 ④大業3年(607)日出処国書提出。大業4年裴世清を倭国に派遣。帰国に際して大量の沙門をつける。推古紀では妹子3月帰国、4月裴世清筑紫に来て、近畿に迎えて9月に帰国。その時大量の留学生をつける。

6)隋書本紀三(煬帝上)大業四年三月、百済、倭、赤土遣使貢方物

大業六年正月、倭国遣使貢方物

7)この倭国と倭奴は同じであろうか。推古紀には大業四年四月に裴世清は筑紫に来ている。三月に中国本土に来たのは別種の倭国としか考えられない。裴世清の帰国は推古16年、大業4年9月である。「遂に絶つ」の年月日は何時か。「遂に絶つ」は大業4年末としたら、大業6年の遣使貢方物から倭国は倭国ではないとした。

次回日程 2021-6-21日(月)15時から18時 かながわ労働プラザ第9会議室

—7-5日(月) 15時から18時 かながわ労働プラザ第9会議室

—7-26日(月)15時から18時 かながわ労働プラザ第1会議室(8階) 変更、もと23日